



Japanese Association of Science & Technology Journalists

JASTJ NEWS

口の中のコスモロジー

西野博喜

古代ギリシャ人は天空を眺め、星々の規則的運行を感じ取った。一定の秩序の存在を見出し、宇宙をコスモス（美しい秩序）と呼んだ。コスモスの世界は神話によって説明された。その後、タレスを始めとするミレトス派の哲学者達によって合理的な説明が求められ、神々の物語は退けられた。科学はここからスタートしたといわれる。

コスモスは口の中にも感じ取れる。法則が存在する小宇宙だ。だが、この領域を扱う歯科が科学としてスタートしたのは20世紀に入ってからだ。1921年に米国のB.B.マッカラムが下顎運動と上顎との咬合に、生理的に適切な位置関係を発見し「中心位」と名づけた。これは歯科界に革命を起こした。

当時の歯科は「木を見て森を見ず」であった。人体の一部であることを考慮せず、少数の歯だけを診て治療にいそしんだ。医療というより穴埋め作業や増築工事に近かった。中心位の発見によって歯科と神経生理学が融合し、全身との関連が究明された。さらに学問としても体系化し、咬合学が築かれた。

一方、リスクも抱えるようになった。咬合理論の臨床応用として考えられた手法の一つ「フル・マウス・リコンストラクション」がそれだ。より快適な咬合を獲得するために、口の中の全ての歯列に金合金で製作された歯冠を装着し、咬合を再構成する方法である。しかし健全な歯質を大量に切削するため弊害も大きかった。

歯には半永久的に保存される仕組みがある。唾液に

含まれる成分が歯面で石灰化し、歯質を強化する。このとき初期虫歯やヒビなどの破損部分も修復される。まるで住家の傷んだ外壁の塗装だ。口の中では24時間無休の塗装作業で形態が保全される。そんな特性を持つ天然歯を削除し、人工物で置き換えれば保全システムは失われる。人工歯冠では経年的劣化は避けられない。また、歯の切削前に必ず健全な「歯髄」が除去されてしまう。歯髄とは歯の内部にある神経・血管・細胞などの軟組織だ。外来刺激に鋭敏なため、健全歯を切削するとすぐに疼痛をみる。あらかじめ除去するのは痛みを免れるためだが、生物学的活性をそぎ、歯は枯れ木のようにもろくなる。

この手法では歯は短命になる。つまり、快適な咬合を享受できる期間はわずかなのだ。口の中の環境には、さほど快適でなくても現状維持できる仕組みがある。うかつに理論を応用してはいけない。

科学技術の時代に、先の話は普遍的な教訓を与えてくれる。「生兵法は大怪我の元」という成句が腑に落ちる。神話の中では秩序を乱したものに罰を科した。自然の秩序に対し、大怪我を防ぐための保守的な姿勢がうかがわれる。反して科学技術は改革的だ。おかげで文明は発達したがリスクも増大した。

自然の背景には何10億年もの歩みの中で発達した秩序がある。持続可能な社会を実現するためにも自然の法則を解明したい。宇宙の「理（ことわり）」を探求するコスモロジーは今も生きている。

(JASTJ理事、歯科医師)

CONTENTS

巻頭言	1
4原発事故調再検証委員会	2
例会報告(9月) 地震学の限界と情報発信	4
会員だより オーストラリア皆既日食観測記	5
会員だより フィンランドの核廃棄物処理施設	6
会員だより 英国で考えた	7

理事会報告	8
アジア版SjCOOP構想/科学ジャーナリスト賞2013	
追悼記 JASTJ初代会長 岸田純之助氏	9
鷗友学園から/WEB編集長から	10
JASTJをサポートする賛助会員一覧	11
事務局だより	12

福島原発事故をめぐる4つの事故調査報告書を再検証 10月例会と名古屋シンポジウムで報告

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）が立ち上げた福島原発事故に関する「4つの事故調査報告再検証委員会」が10月23日に10月例会で、また10月28日には名古屋大学で開いたJASTJ主催（共催：名古屋大学産学官連携推進本部）のシンポジウムで、政府、国会、民間、東電の事故調査報告書の検証結果について報告した。

〈10月例会〉

ほど遠い真相解明

10月の例会では、司会・まとめ役の柴田鉄治氏が一つの原発事故について4つもの事故調査報告書が出たことを「極めて異例」と述べ、再検証委員会立ち上げのきっかけを説明した。この日は再検証委員会のメンバー7人が検証結果を報告、その後に活発な質疑応答も行われた。

堤佳辰氏は「4つとも似たり寄ったり。統一報告はできなかったか」「政府事故調が天災への備えが欠け、事後対応できなかった人災としたのは正しいが、今後の方策に触れた報告はない」と批判した。炉の内部が明らかになりつつあるが、すでにどの事故調も解散、原子力規制委員会も究明に乗り出さないことに苦言を述べた。

高木鞆生氏はテレビ会議記録映像に注目。官邸、東電本店、現場を結ぶ発想がなかったこと、東電の勝俣恒久会長、清水正孝社長が事故当時どのような意思決定をしたのかが明確でないこと、客観的な映像記録の公開が当事者に委ねられていることなどをあげ、どの事故調もこれらの問題を十分に追及していない点を指摘、「責任を問わず歴史を軽視する社

会ではムラ構造は変わらない」と述べた。

横山裕道氏は「原発事故の真相」について、①国会事故調が地震による配管損傷可能性を指摘、②政府事故調が第2原発との比較で操作ミスを鮮明化、③国会事故調の官邸批判は野党主導、④いずれの報告書も真相解明に程遠い、と結論した。さらに「人災」としながら個人の責任を追求しない不思議さや、自民党政権など政治家の責任に切り込めなかったことなどを指摘した。

柴田氏は「事故処理のリーダー」「全員撤退」に注目。菅首相が司令塔を任命しなかったことを「最大の失敗」と述べた。東電の「全員撤退」については、社長からの電話や『全員退避は何時頃?』という記録が残っている点を指摘、東電幹部は全員撤退を考えただろうと述べた。

荒川文生氏は「原子力ムラ」の問題に迫った。組織が天災を大きな災害にしたとみて、東電事故調は「自分を見る鏡を持たない」、民間事故調は「ムラの構造をどうすべきかの提案は不明」、政府事故調は「技術を使う人組織の分析はない」、国会事故調は「規制当局を虜にした事業者が村長」と報告。ムラは破壊すべきではなく、作りなおす必要があるとした。

なぜ再検証委員会を立ち上げたか 比較・検証で真実に迫る

福島原発事故は日本の原子力政策を根底から揺るがせただけではない。原子力報道から始まったともいえる日本の科学報道にも深刻な反省を迫るものだった。事故原因を究明するために、政府、国会、東電、民間の4つの事故調査委員会が立ち上げられたが、1つの事故をめぐる4つもの事故調が動き出すのは極めて珍しい。そこで、それらを比較・分析して再検証するのは、私たちジャーナリストの仕事ではないかと考えた。

JASTJ理事会に再検証委員会の立ち上げを提案して了承を得、会員に呼び掛けたところ18人が参加を表明、今春から動き始めた。毎月1回程度の意見交換や国会事故調による参考人聴取の傍聴、さらに福島原発と同型の敦賀原発所長を務めた板倉哲郎氏を講師に勉強会を開くなどして報告

書が出揃うのを待った。

2012年7月末までに4つ出揃った。しかし、メディアの分析や解説を追っても、報告書に直接当たっても、福島で何が起きたのか、原因は何なのか、肝心なことがさっぱり見えてこないのである。4報告書に共通するのは、原因究明がすっかりしていないことと、事故の責任追及が一切なされていないことだ。小さな列車事故や交通事故、工場の火災や爆発事故でも刑事責任が追及されるのに、誰ひとり責任を問われないというようなことはありうるのだろうか。不思議でならない。

私たち再検証委員会の分析結果は、JASTJの10月例会と名古屋大学で開いたシンポジウムで報告した。さらに年内には水曜社から速報版を、2013年の3月には化学同人社から詳報版を出版する。私たちの再検証によって、少しでも福島事故の真実に迫れたら嬉しく思う。

(JASTJ理事 柴田鉄治)

議論不足の放射能問題

桶田敦氏は、SPEEDI 結果の公表遅延について、放出源情報無しという想定がなかったこと、原子力防災関係者が有用性に懐疑的だったことを理由としてあげ、放出総量不明でも有用とした政府事故調の結論を支持した。

放射性物質大量拡散と沈着については事故調の議論は不十分で、最大の不安である初期被曝では安心安全情報の錯綜、ソーシャルメディアと既存メデイ

アの対立が影響したとした。

林衛氏は安全論に偏った防護政策、リスクコミュニケーションの欠落を取り上げた。低線量被曝影響評価の「疫学を重視する公式見解」と「様々な臨床症状を重視する民間市民団体」の対立に関し、疫学の精度がない場合も分子生物学知見での補完が可能で、費用対効果分析よりも個人防護を重視するICRP 元委員長らの主張を紹介、日本ではこれらを考慮せず混乱したと述べた。

(JASTJ 会員 内村直之)

〈シンポジウム〉

見えてきた疑問点を市民に発信 会場から厳しい質問も

11月28日に名古屋大学で開いたシンポジウム「福島原発事故をめぐる4つの事故調査報告書を再検証する」では、4つの事故調査報告書から見えてきた疑問点を市民に向けて発信した。あいちサイエンスフェスティバルへのJASTJの参加企画は昨年に続き2年連続となる。

最初に「福島原発で何が起きたか？～今わかっていること～」と題して、専門家の立場から名大の山本章夫教授が原子炉の状況について、山澤弘実教授が放射能拡散予測システムSPEEDIによる予測と実際の差異について、現段階で判明している事実を時系列に沿って説明。これを受け、JASTJから柴田鉄治、小出五郎、横山裕道、高木勲生の4理事が順に登壇。東京電力や政府が明

らかにしていないと疑われる点についてそれぞれが論点を提示した。

パネルディスカッションには講演した6人に加え、名大の山本一良理事・副総長（原子力工学）も登壇。アカデミアによる独自検証チームがいまだに事故の現場に入れないという問題や、政府や東京電力の対応、リアルタイムでの科学的予測との関係などの議論を展開した。さらに、会場からメディア人として過去の仕事と検証プロジェクトとの関係性を問う厳しい指摘も飛ぶなど、科学技術ジャーナリズムのあり



エネルギー理工学専攻を持つ名古屋大学との連携で専門家との対話を実現 (提供 名古屋大学産学官連携推進本部)

方への議論も深まるシンポジウムとなった。

(JASTJ会員・名古屋大学あいちサイエンスフェスティバル事務局 藤吉隆雄)

再検証委員会に加わって 自らの反省と被災者の立場で事故を見る

「もともと皆さんはマスコミの大企業に属していて、結果的に原発を推進する役割を果たしてきた。その辺をどう総括して4事故調の再検証に取り組んだのか」。名古屋大学でのシンポジウムで会場からこんな質問が飛んだ。

JASTJの報告者4人がそれぞれ答えたが、私は概略次のように述べた。「毎日新聞で論説委員を10年以上務め、科学環境部長も経験した。原子力については厳しく書いてきたつもりだが、正直言っている会社の上層部からの圧力をひしひしと感じた。そうした圧力をはねのけて、地震国日本に50基以上の原発がある不条理をもっともっと書くべきだったと反省している」

当然の質問であろう。私も再検証委員会に加わって、ま

ずは自らの至らなかった点を悔い、各事故調の報告書が原発事故でふるさとを追われた被災者たちの思いに応えたものかどうかを検証したいと考えた。そういう目で見ると、4事故調の報告書は合格点をはるかに下回ったと思う。

各報告書は原発事故の発生と拡大の真相に迫り切れなかったし、個人の責任追及は放棄した形になっていた。「線量が高くて現場検証ができない」「事故調査と責任追及は別物」といった言い訳が聞こえてくるが、これでは福島第1原発周辺の人々にとって全く納得できないだろう。

今後も「マスコミも原子カムラの一員」とみられていることを忘れず、被災者の立場から福島第1原発事故を見続けることが不可欠だろう。政権が代わると原発再稼働の動きが活発化しそうだが、福島第1原発で何が起こったかが明らかになっていない段階でそう簡単に再稼働を認めるわけにはいかない。

(JASTJ理事 横山裕道)

地震学の限界と情報発信を考える

東京大学地震研究所助教の大木聖子氏に聞く

9月13日の例会では、地震学の広報、教育現場や自治体での防災対策、メディアや国際学会などで科学と社会との連携を訴えるなど、多彩な活動が続ける東京大学地震研究所の大木聖子助教が、コミュニケーションの大切さを語った。

切れの良い言葉、世相などの比喻を巧みに使った分かりやすい表現、科学とは何か、防災とは何かという真摯なまなざしを基軸に、東日本大震災で噴出した問題、矛盾、限界、可能性を次々と提示し、解決への方向性をさぐる、広範囲でしかも濃厚な90分。同地震研究所の額額一起教授もオブサーバーとして質疑に参加してくれたこともあり、討論も1時間以上、最後は閉館作業を進めるプレスセンタービル職員に追われるように閉会した。

指摘の第一は、東日本大震災の発生で、地震学は「科学の限界を突きつけられ」、大きな変革を余儀なくされたこと。

これまで、東北地方の太平洋沖は大きく7つの区画に分けられ、それぞれの区画領域での30年間の発生確率、連動した場合の予測などが示されていたが、「宮城県沖」と「三陸沖南部海溝寄り」の2つの領域が連動しても、最大限マグニチュード(M) 8.3までの規模の地震しか発生しない、というのが地震学の認識だった。しかし、実際には岩手県沖から茨城県沖まで400キロ、幅200キロに及ぶ6つの区画が連動する断層破壊が発生。アラスカか南米でしか起きないとされていたM9の規模となり、日本地震学会は根底から研究手法の立て直しに取り組んでいる。

こうした事情を背景に、大木さんは、従来の「科学」は社会の中で「進歩を支える、繁栄をもたらす」ポジティブなイメージだけで語られてきたが、その限界と可能性をきっちり見極める必要が出てきたと、社会と科学の関係の変容を指摘。報道もこの変

化に機敏に対応するよう求めた。

また地震学は、実際に発生した地震に関しては詳説できるが、将来発生する地震に関しては地殻破壊現象の複雑さ、実験で検証できない、蓄積データに乏しく古文書など過去の

記録に頼るしかない——という三重苦によって、予測は極めて困難な状況にある。この現実に対し、地震予知、防災科学を実用的な視点で捉え直し、再編する必要があることも説いた。

一方、日本ではどこでも、震度7クラスの内陸型地震が起こる可能性があることを訴え、「日本の耐震建築は震度7までは耐えられる。防災対策を普及させ、〈震度7では死なない〉ことを目標にしよう。そのためには、私たち専門家が知見をわかりやすく伝える使命がある」と、コミュニケーションの大切さを語った。

さらに、津波で多くの死者を出した宮城県石巻市、屋上に逃げて助かった名取市、屋上から高台まで逃げて助かった南三陸町などの小学校の実例を挙げて、日ごろから「避難」とは何かを一人ひとりが考える必要性を強調。これに関連して、2008年から各地の小学校の防災プログラム改善に取り組んでいる実情も紹介した。

地震予知が困難にも関わらず、「東海地震が明日発生するので、それに向けて避難訓練をする」という硬直した防災プログラムを変えられない教育現場を批判し、それぞれの状況で、児童一人ずつに自分の頭で考え、行動する習慣を身につけさせる防災教育の大切さと、首都圏などでその成果が出始めていることも報告した。

「コントロールできれば恵み、できなければ災害と、人間は自然を勝手に解釈しているが、そんなこととは関わりなく自然は大きな営みを続けているもの。こうした自然の本質を伝えることこそ、科学者の役割だと思う」

焦点深度の深さも印象づけたレクチャーだった。

(JASTJ監事 小出重幸)



自然の本質を伝えることの重要性を訴えた大木聖子さん (撮影 高木毅生)



地震災害を巡り予定時間を超えて質疑が続いた (撮影 高木毅生)

オーストラリア皆既日食観測記

わが国で25年ぶりの5月金環日食から半年後、今度はオーストラリアを中心として皆既日食が見られるとあって、JASTJの武部俊一会長、柴田鉄治理事、会員の田中慶一さんと私の4人が皆既中心線近くのケアンズに出向いた。私は大学のOB会が主催する観測隊の一員としてケアンズ郊外の標高約20メートルにあるジェームスクック大学（JCU）のグラウンドを借用して観測を行い、ビデオによるコロナの拡大撮影を行った。また武部会長ら3名は標高約360メートルのアマルーという小高い丘で主に眼視観測などを行った。

ケアンズの奇跡！

皆既が朝6時38分から約2分間見られるので、当日未明に観測地に入り各人それぞれ準備に入った。しかし朝から雲の多い天気で、日の出からほとんど太陽を見ることもなく時間が過ぎ、さらに小雨も時折降る最悪の状況になっていた。

しかし皆既時刻から数秒が過ぎ、だれもが諦めかけていたその時、雲の切れ間から突然現れたコロナに周囲に集まった人々から歓喜と驚きの声が湧き上がった。周囲が急速に暗くなり皆既中には金星も輝き、地平線は赤く染まるという皆既日食特有の現象も見ることができた。

小雨も混じる天候の中で、コロナとダイヤモンドリング（JCUのみ）を見ることができたのは奇跡としか言いようがなかった。晴天下の皆既日食ではなかったのですが、絶望から一転して歓喜に代わる皆既日食を初めて経験したこと



皆既突入直後に雲間から出現したコロナと慌て飛び立つ鳥の群れ
(撮影 山本威一郎)



皆既日食後に明るさを取り戻した観測地。手前が筆者の望遠鏡
(撮影 山本桂子)

は特別な記憶として残りそうだ。

日食病は治らない

ケアンズ市内には日本から来た日食ファンも多く滞在し、また海外からも多数訪れ、その数は6万人とも言われている。皆既日食の不思議な体験を一度すると、非日常の世界が忘れられず何度も海外に出向く人を「日食病」にかかったと呼んでいる。晴れてコロナが見られて「勝ち」、曇天で見ることができないと「負け」に数え、中には11連勝とか、3連敗中などと表現する人もいる。ちなみに私は39年前の1973年にアフリカで日食病に感染して以降6勝1敗（2009年種子島）となっている。

この日食ツアーは80年代になってから国内外で盛んになり、皆既帯が通過する場所ではホテルの宿泊料が通常の倍以上に跳ね上がり、観望の良い観測地ではイベント会場の様相を呈して入場料も徴収する始末。それでも毎回皆既日食を見に行くようになれば、本物の日食病患者の仲間入りといったところでしょう。

今回の皆既日食は、2013年11月3日にガボンからコンゴにかけて、2015年3月20日にもノルウェー海から北極にかけて起きるが、日食条件や治安などから2016年3月9日のインドネシア、2017年8月21日の北米横断あたりが良いと思われる。皆様も一回は体験してはいかがでしょうか。

(JASTJ理事 山本威一郎)

世界唯一の核廃棄物処分場を訪ねて フィンランド「オンカロ」報告

NHK特集『原子力 秘められた巨大技術（3）どう棄てる放射能』を1981年にディレクターとして制作した。それから30年、人類初の「原発連続爆発・メルトダウン」事件が起きた。それまで隠されてきた原発最大のアキレス腱「高レベル放射性廃棄物」の処理・処分問題がクローズアップされている。膨大な使用済み核燃料をどうするのか？再処理した場合、“死の灰”や“死の廃液”をどう処分するのか？この深刻な問題を追ってフィンランドの核廃棄物処分場「オンカロ」取材した。

“隠された場所”の情報公開

私が監督として制作しているドキュメンタリー映画「いのち」（注）の撮影と、早稲田大学ジャーナリズムコースで院生が制作する海外取材作品を現地指導することが目的であった。

「オンカロ」とは現地語で“隠された場所”を意味し、ボスニア湾に面したフィンランド西岸のオルキオ島に位置する。首都ヘルシンキからは北西方向へ250kmほど行ったところにある。核廃棄物最終処分については米・英・仏・独・日本などが1950年代から取り組んでいるが、どの国も成功していない。国際社会は「トイレなきマンション」状態のままなのだ。フィンランドのみが深さ400mの穴を掘り、処分計画を進めている。

なぜフィンランドでは他国に先がけて地層処分計画が実現しようとしているのか。事業を進めている企業の技術者は、オンカロの地層が10億年以上も動いておらず巨大地震がない点を、その理由としてあげた。

グリーンピースや緑の党に取材したときには、彼



高レベル放射性廃棄物の処分場のトンネル入り口。内部の撮影は不許可だった
(撮影 林大樹)

らがこの計画を容認していることに驚いた。その理由を聞くと、地質的に安定であるとする専門家や政府に対する信頼感と、徹底した情報公開で決定した点をあげた。

ただし同時に、10万年～100万年間本当に地下水が漏れ出ないのか、氷河期に核燃料棒を包み込む銅製のキャニスターが安全でいられるのか、その危惧を一樣に述べていた。

どうする？地震大国日本

それでは地震大国日本で高レベル放射性廃棄物をどう処分するのか。現在、日本だけでも広島原爆の120万発分の核廃棄物をためこんでいると京都大学原子炉実験研究所の小出裕章助教は証言する。

コスト・リスクが極めて高い核燃料サイクルと軽水炉を1日でも稼働すれば、それだけ行き場のない核廃棄物は増え続けていく。これ以上我々は単に電気が欲しいと、効率と欲望を肥大化させ続けて良いものなのか。22世紀を生きる将来世代は、私たち現在世代の責任をどう見ることになるのか。深刻な問いが投げかけられている。(JASTJ理事 林勝彦)

(注) 映像作品「いのち」はインターネットで下記のURLから見る
ことができます。

<http://hayashieizousakuhiminochi-katuchan.blogspot.jp/>



オンカロの看板と筆者
(撮影 林大樹)



中レベル放射性廃棄物の処分場に続く地下道

(撮影 林大樹)

美味追求を潔しとしない文化

「おいしいとか、まずいとか言うこと、これを潔しとしないんだ」

“英国の味覚”は一番盛り上がる話題のひとつだが、前回登場したインペリアル・カレッジの英語学教授、ジョンは、討論にあたってこう釘を刺した。

「ダーウィンの家」見学して食文化談義

ロンドン南東部、ケント州の田園に「チャールズ・ダーウィンの家」博物館 (Down House) がある。広大な庭園を抱えた邸宅には、「種の起源」を著した書斎から、実験室、ピアノや管楽器が並ぶ大きな音楽室まで、当時の状態で保存されていて、ヴィクトリア時代 (19世紀) の英国のパワーを伝えている。

一緒にこの見学に出かけた後、近くの丘陵にあるパブ (居酒屋・食堂) に立ち寄った。特産のエール・ビールとつまみを両手に、青空の下、屋外でテーブルを囲む。草原や森のうねりを見下ろすごきげんな食卓で、この話題になった。

ジョンによると「食事はまず胃を満たすこと、次に栄養のバランスも大事だ。まあ、彩りがあってもよしとしよう」という。同行の中国人留学生らが毎晩2時間かけて翌日の弁当を調理していると聞いて、彼はこうアドバイスした。

「コメを炊くのは良い。これをランチボックスに詰める。ツナかサーモンの缶詰を開けて上にかけて、キュウリ、タマネギ、トマトを切って載せる。これで栄養、色彩とも十分。5分のできるぞ……」

中国の友人らに、ジョンのメニューは評判が良くなかったが、彼の指摘には、英国人の食文化が端的に表現されている。



「チャールズ・ダーウィンの家」博物館で。中央の白いシャツがジョン教授で右端が筆者 (提供 小出重幸)

武士は食わねど・

先祖代々、ケント州の出身。オクスフォード大学で言語学を学んだ生粋のイングランド人だ。こうした大学に進む高校生を教育するのが、パブリックスクール。勉学のほか、クリケット、ボート、トレッキングなどのスポーツから、エジプト、ギリシャの古典籍から文学、哲学、美術、そして鍵盤楽器やバイオリンの演奏——と、実に幅広く学ぶ。同時に、組織や社会の上に立つ人材としての自覚、責任感も仕込まれる。

こうした英国教育の中でよく使われる言葉に、「Keep a stiff your upper lip. (口元を引き締めよ)」というのがあるが、美味追求を卑しいとする感覚は、この格言の精神と同根かを尋ねてみた。一瞬考えたジョンは、「まあ、近いところだな」と、頷いた。

粗食でも耐えられるという資質を培ったから、英国人は世界の海を制覇できたんだね、と言うと、たぶん、そうなんだろう、とジョンはうれしそうにうなずいた。

味が分からないんじゃない、追求しないのだ——。日本にも武士の矜持として同じ精神が伝わっているから、「粗食が一番ぜよ」という気概は評価したい。しかし、英国在住の日本人はみな、「同じ素材でも、下味をつけるなどおいしく食べる気配がない」と、一蹴する。名物のフィッシュ・アンド・チップスも、タラ類の切り身に小麦粉をつけ、そのまま揚げたもの。味がついていないから、自分で塩コショウ、ケチャップ、酢などをかけて食べることになる。

そういう英国で、ひとつの例外が地ビールの「エール」だ。樽の中で活きている酵母の機嫌には、給仕側も飲み手もえらく神経質で、味の変化にうるさいのだ。従って、まがうことなくおいしい。

日本に戻って、ブリティッシュ・パブにでかけた。くだんのフィッシュ・アンド・チップス、日本では素材の鮮度も良く、また下味がついているので、格段に美味だが、ビールを一口飲んで気がついた。かおりの良さ、味の繊細さが、ロンドンのパブには遙かに及ばないのだった。(JASTJ監事、元英インペリアル・カレッジ・ロンドン客員研究員 小出重幸)



キドニーパイと例外のエール・ビール (撮影 小出重幸)

途上国の科学ジャーナリスト養成へ アジア版SjCOOP構想

世界科学ジャーナリスト連盟のジーンマルク・フロイリー氏が10月下旬に来日した。アフリカ、中東地域を対象にして実施した科学ジャーナリスト養成プログラム「SjCOOP（スコープ）」をアジアでも実施することになり、その準備のためにプロジェクトオフィサーのユーン・キム氏とともにやってきたのである。

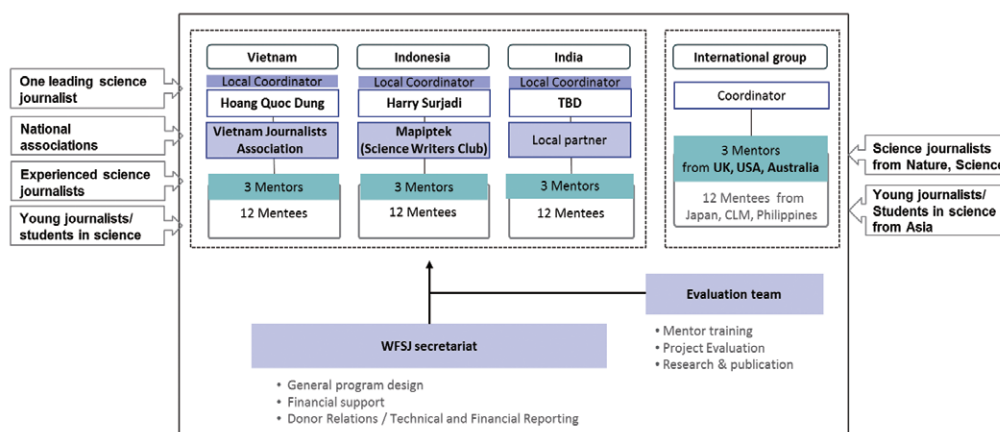
10月22日（月）の夕方、日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の関係者たちがプロジェクトの概要を聞く会を東京・内幸町の日本プレスセンターの会議室で開いた。アフリカ・中東版は1期、2期と続き、大きな成果を挙げたこと、アジア版についてはカナダのIDRC（国際開発研究センター）がスタートアップ資金を出すことを決定し、今後、世界各国の公的ならびに民間財団に支援を求めていくこと、などの説明を聞いた。

前後して総合科学技術会議、科学技術振興機構（JST）、早稲田大学、笹川平和財団などの関係者とも

彼らは面談し、プロジェクトの内容を練り上げるのに大いに参考になったと喜んでいて、その成果を踏まえて彼らがまとめたプロジェクトの枠組みをお示しする（下図）。

ご覧のように、対象国はベトナム、インドネシア、インドで、それとは別に「国際グループ」として英語で発信する科学ジャーナリストのためのコースを作る。ここには日本からの参加者も受け入れるようになっている。一方、JASTJには、各グループのメンターを集めてプロジェクトについての共通理解を持つ「メンター会議」ならびに参加者全員が一堂に会する「全体会議」各1回の企画・運営が期待されている。

世界連盟創設メンバーとして、またアジアでいち早く科学ジャーナリストの国内協会を作った「先輩」として、JASTJはSjCOOP Asiaに主体的にかかわっていきたいと考えている。会員皆さまのご支援をお願いしたい。（JASTJ理事 高橋真理子）



科学ジャーナリスト賞2013

科学ジャーナリスト賞2013の募集を開始しています。今年も例年と同様に、会員のみならずから候補作を募っています。また1次選考に携わっていただく「バーチャル書評委員」も募集しています。ふるってご参加ください。

候補作品の推薦およびバーチャル書評委員への応募方法などは、2012年11月22日付でJASTJ会員向けにお送りしたメールをご覧ください。

◎募集の内容

科学ジャーナリスト賞は、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた方を表彰します。原則として個人（グループの場合は代表者）を対象とし、ジャーナリストだけではなく質の高い啓蒙書を著した科学者や科学技術コミュニケーターなども対象にします。

- ・応募＝自薦・他薦は問わない
- ・締め切り＝2013年2月末

◎授賞対象

2012年4月から2013年3月末までに公表された作品。ただし3月以降に発表されたものに限り3月末まで受け付ける。

◎選考方法

・1次選考

1次選考に協力してくれる会員を「バーチャル書評委員」として任命し、応募してきた作品（新聞および雑誌記事、テレビ映像、書籍など）を分担して個別に評価し、最終的に議論したうえで2次選考に上げる10数候補を決定する。

・2次選考

白川英樹・筑波大名誉教授ら5人の有識者（外部委員）とJASTJ理事5人（内部委員）からなる選考委員会が、1次選考を通過した10数候補の中から大賞、賞を決定する。

（JASTJ理事 滝順一）

追悼記



日本科学技術ジャーナリスト会議
主催の講演会「大震災と報道」
(1995年)で開会のあいさつをする
岸田純之助会長 (撮影 武部俊一)

技術を吟味したロマンティスト

先端技術が国際政治や経済社会に深くかかわるようになった20世紀後半、草分けの科学ジャーナリストとして広い視野で活躍した岸田純之助さんは、根っからのロマンティストだったと思う。『科学朝日』記者時代の宇宙開発報道への傾倒や論説委員時代のテクノロジー・アセスメント (TA)への情熱にその姿勢がうかがわれる。

音楽にも造詣が深く、東大入学時の1940年に新交響楽団 (NHK交響楽団の全身) のベートーヴェン「第9」を聴いていたら60年をこえるN響会員だった。駆け出し記者時代のヴァイオリニスト巖本真理さんとのつきあいにも熱いものがあつたようだ。

岸田さんが最も熱く論じたのは「技術を人間の管理下に置くため」の方策だった。70年代の初め、TA (彼の言葉でいえば「技術の吟味」) の思想を日本にも根付かせようとする社説を連発している。これに触発されて、科学部にいた私もオランダで開かれた第1回国際TA会議を取材するなど、多少の記事を書いた。残念ながら日本ではいまだに制度として定着していない。岸田さんか

ら科学ジャーナリストに託された大事な宿題だと思っている。

私は岸田さんの論説主幹の最終年の1983年に論説委員になった。原子力については「技術としては是認するが、平和の技術としては未熟。安全性と経済性の確立、原子力行政の信頼性、軍事転用の阻止が推進の条件だ」と論された。いわゆる「イエス・バット」だ。私は「バット」を「必要条件」に近いものと受け取って社説を書いた。ところが、3.11後の記者の質問に岸田さんが「あれは努力目標だった」と答えていたのは腑に落ちない。

岸田さんはバスケット、剣道、テニスなどとスポーツも愛好された。論説主幹時代は野球のユニホームまでつくって社内対抗試合に興じた。そんな多能選手の岸田さんに、どうしてもできないことがあつた。缶飲料のふたが開けられないのだ。天国でも、恥ずかしそうに隣りの人に頼んでおられるにちがいない。初代会長としてJASTJを生み育てていただいたことに感謝し、ご冥福を祈る。
(JASTJ会長 武部俊一)

「ではまた、岸田さん」

岸田さん、ご無沙汰していましたが、こう急にお別れの時が来るとは。貴方は科学記者の草分け、尊敬する大先輩で、かねがねご指導頂きました。温厚な長者の風で、野人の多い新聞記者の中では“鶏中の一鶴”でした。

学究肌で造詣が深く、色々教えられました。確か旧制三高、東大航空学科出身で、小生のような法科出の“付け焼刃”とは基礎が違いました。科学朝日時代は核兵器、ICBM、スプートニクなどの解説と論評に健筆を揮い、科学技術に疎い世論をリードしました。

有名な「イエス、バット」については小生直接聞いたのですが、“原子力記者第一号”と自負する渡辺誠毅氏が社長に就任して、論説主幹の岸田さんが猛者揃いの第一線記者との“融和”？に打ち出した苦心策とのこと。報道に「是是非非」は私も賛成です。

岸田さんご自身、原子力、宇宙など新しいものに前向きでした。日本未来学会の創設に携わったり、当科学技術ジャーナリスト会議の初代会長に就任したり…。

著書、論文も多いのですが、論旨明快、裏付け豊富、みなわかり易い文章でした。「(一旦スタンスを決めてから) 余り現場を見て人に会うと論旨が狂う」と言われて、流石は論説主幹、小生のような現場記者は一驚しました。

それでも好みはあり、太陽電池の将来性に惚れ込み、小生が「稼働率が低く、コストが高い」と言うと、機嫌を損ねました。そうした人間味が私は好きでした。

137億年昔に始まった宇宙は今も進化中。人生は有限でも科学は永遠です。

岸田さん、さようなら。また、お会いしましょう。

(JASTJ会員 堤佳辰)

観察者の目を育てる理科教育

会報 63 号で新入賛助会員としてご紹介いただいた鷗友学園です。本校は 1935 年の創立以来、キリスト教精神による全人教育を心の基盤にした教育を行っており、学問の本当の楽しさを生徒に伝えることを目標にしています。東京府立第一高等女学校の同窓生が創立した学校ということもあり、現代にあって、あえて女子教育にこだわる意味をも追究しているところです。

理科教育には力を入れており、中 1 では「見て、触れて、感じる理科」、中 2 では「考えて発見する理科」をテーマに、実験室で授業を行います。理科系の生徒を育てるためではなく、理科的な学びを通して観察者の目を育てる、根拠をもとに科学的なものの見方や判断力を身につけることを目標にしています。中学校ではオリジナルテキストを用いながら、授業の大半で観察や実験を行うので、理科学習の魅力に目覚める生徒が多く、高校

卒業時には、理科系進学者は約 50% にのびります。

最新の科学に対する生徒の関心は大変高いと感じています。たとえば、京都大学高校生フォーラム in Tokyo に昨年より参加する機会を得、参加者を募ると毎回定員をはるかに超える希望者があります。また 5 月の金環日食の折には約 1500 名中 900 名もの生徒が朝早く登校し、グラウンドで日食グラスを手に世紀の瞬間を共有しました。ことに福島原発事故以来、中高生は自分たちの生きるこの国は今後どのような方向に進むべきなのか、若いしなやかな感性を持って一生懸命考えています。

「良い報道」とは何かとは大変難しい問題だと思いますが、ジャーナリストの皆さんの発信されたものを通して、生徒たちが多くを学び、自らの力にできるよう望んでいます。

(鷗友学園女子中学高等学校校長 西川邦子)

WEB編集長から

最近では政治の話題も Facebook で発信されるようになりました。Facebook には携帯電話やスマートフォンからもアクセスできるようになっています。今年度、JASTJ は Facebook での発信に力を入れています。JASTJ ウェブサイト (<http://jastj.jp>) のトップページ左下に、[find us on Facebook] のバナーを配置しました。まだ JASTJ の Facebook ページにアクセスしたことがない方は、このバナーからアクセスしてみてください。皆様からの書き込みもぜひお願いします。

■リンクの紹介を引き続き募集中!

皆様へアンケートとしてお送りしたリンク希望先を集計し、新しいページを作成中です。ご自身のウェブページを広報する絶好のチャンスですので、ぜひお知らせください。賛助会員の方々への特典として、JASTJ トップページに企業ロゴの入ったバナーを表示して、各賛助会員のウェブページにアクセスできるようになっています。JASTJ 会員にぜひ見てほしいと希望されるページがありましたら、この機会にお知らせください。

■JASTJ ウェブページの運営について

JASTJ はこれまで、宝塚メディア図書館にウェブデー

タの更新やメンテナンス作業を依頼していましたが、依頼先の都合により、この秋から JASTJ 事務局が直接、更新作業とメンテナンスを行うことになりました。より迅速な情報公開や、事務局が扱いやすいメールサービスの提供ができると考えています。

例えば、現在のところ会員間の情報交換のためのメーリングリストは、Google Groups という Google が提供するメーリングリスト提供機能を通じて運用されています。Google Groups から第三者にメールアドレスを提供することはありませんが、昨今のセキュリティ意識の高まりにより、外部の機関には自分のメールアドレスを提供したくない、という会員の声があるのも事実です。

また、セキュリティ重視の観点でもありますが、Google Groups のメーリングリストは、加入してもらうためにさまざまな作業を要求されるという、運営側からの課題もあります。過去に数回のメーリングリスト変更がありましたが、今後は JASTJ が直接メーリングリストを管理する方式に変更する予定です。詳細が決まりましたら、このコーナーで改めてご案内いたします。

今後とも、ウェブページに対して何かご意見やご要望がありましたら、system.jastj@gmail.com までお寄せください。
(Web編集長 藤田貢崇)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2012年12月現在)

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

株式会社東芝

おいしさ、そして、いのちへ。
Eat Well, Live Well.
AJINOMOTO®

味の素株式会社



日本電信電話株式会社



鷗友学園女子中学高等学校



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



花王株式会社



ノバルティス ファーマ株式会社



独立行政法人 科学技術振興機構

HITACHI
Inspire the Next

株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



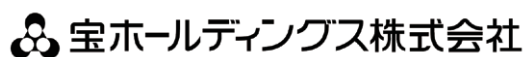
三菱電機株式会社



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



ロート製薬株式会社



宝ホールディングス株式会社

賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

● **森田 政宏** (日立オムロンターミナルソリューションズ)
専門領域はITシステムとロボティクスを核として、ロボット技術の進歩と将来の動向。日立評論を5編以上執筆しており、技術的なテーマの執筆を定年後も関わりたい。

● **楠見 春美** (編集者、ライター)
日本科学未来館で9年ほど科学を伝える書籍、電子書籍、ウェブの企画編集を務めました。昨年11月末に退社し、秋にもフリーで活動を始める計画です。科学技術が市民生活に及ぼす影響や光と陰を伝え、考える機会をつくっていただけたいと思います。

● **鈴木 美慧** (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻)
遺伝カウンセリングの専門過程で医療現場での科学情報の扱い方を学んでいます。広く遺伝の知識を啓発していくうえで、皆さんとの交流や議論を通して多くの学びがあることを期待しています。

退会

武村政春 大石かおり 鈴木萬理子 熊谷玲美
武村敏弐 長濱聖 大村正和 伊達達也 諸岡七美
山田久美 島田誠 佐藤匠 小島修一 門脇仁
吉田幸生 宝塚メディア図書館 第一三共
パナソニック電工

編集後記

▶今年の師走は総選挙で一段とあわただしくなりましたが、その重要な争点の一つが原発をどうするかです。しかし、肝心の原発事故の真相はどこまで明らかになったのでしょうか。今回の会報では、その疑問に取り組みのために会員有志による「4つの事故調再検証委員会」が中心になって開いた月例会報告と名古屋でのシンポジウムの内容をレポートしました。新刊紹介にある『4つの「原発事故調」を比較・検証する』も同じメンバーが執筆していますので、併せてお読みいただければと思っています。

▶JASTJも参加する世界科学ジャーナリスト連盟は今年で設立10周年。連盟のウェブサイトがそのお祝いの特集を組んでいますが、わが国際担当理事の高橋さんの署名記事も掲載されています (<http://www.wfsj.org/news/news.php?id=294>)。連盟は2002年11月にブラジルで開かれた第3回科学ジャーナリスト世界会議で設立が決まりましたが、そもそもこの世界会議の第1回は20年前に日本で開かれたものです。すべての始まりは日本にありました。(鞆)

「会報編集記者」を募集しています

JASTJ会報(年4回発行)の執筆にご協力いただける方を「会報編集記者」として募集しています。会員の皆様、特に若手会員には取材・記事執筆の実践の場としてお使いいただくよう積極的なご応募を期待しています。

◎執筆をお願いするのは?

月例会の報告や見学会の参加ルポなどの原稿。執筆可能かどうかを各会報編集記者にその都度事前に確認したうえで、OKをいただいた場合のみ執筆をお願いします。

◎謝礼

執筆者にはJASTJより図書カード(3000円)を贈呈します。

◎応募方法

JASTJ事務局 (hello@jastj.jp)、または会報担当の高木 (tyuki7581@yahoo.co.jp) までメールでお申し込みください。

会員の BOOKS

新刊紹介

『4つの「原発事故調」を比較・検証する 福島原発事故13のなぜ?』

日本科学技術ジャーナリスト会議 編著 (水曜社・1600円・2012年12月)

福島原発事故の真相解明を掲げて政府、国会、民間、東京電力の4つの事故調査委員会が報告書をまとめた。本書は「イベントはなぜ遅れたのか」「なぜ個人の責任追及がないのか」など13の疑問を提起して、これらの報告書がどこまで真相に迫っているかを検証したものだ。日本科学技術ジャーナリスト会議の会員10人がそれぞれ独自の切り口で4つの報告書を比較検証しており、科学ジャーナリストの視点の違いも含めて興味深い本になっている。



編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science & Technology Journalists (JASTJ)

〒104-0044 東京都中央区明石町5-15 明凶ビル5F
武田計測先端知財団内
電話・FAX: 03-5550-7127 Email: hello@jastj.jp
会長/武部俊一、事務局長/引野 肇
編集長/高木鞆生 (tyuki7581@yahoo.co.jp)